特259
663

菅原時保禪師

碧巖錄講演

（其十八）

始

特259
663

帝國圖書館藏

臨濟宗
建長寺派管長
菅原時保禪師

碧巖錄講演

（其十八）

昭和十四年九月
帝國圖書館藏

碧巖錄提講

第四十三則　洞山無寒暑

◎垂示

垂示云、定乾坤句、萬世共遵、擒虎兒機、千聖莫辨、直下更無纖翳、全機隨處齊彰、要明向上鉗鎚、須是作家爐鞴、且道、從上來還有恁麼家風、也無、試擧看、』

讀方

垂示に云く、乾坤を定むるの句は、萬世共に遵ひ、虎兒を擒ふるの機は、千聖も辨ずること莫し。』直下に更に纖翳無けれ

ば、全機處に隨つて齊しく彰る。向上の鉗鎚を明らかにせんと要せば、須く是れ作家の爐鞴なるべし。』且く道へ、從上來、還恁麽の家風有りや、也無しや。試みに擧す看よ。』

「虎兒」は虎の子ではありません。或本には、一角あり其の長さ三尺、とあります。動物學上から云へば、水牛よりも寧ろ犀牛に近き野獸である、と。』

「鉗鎚」の鉗は火の中の金屬をはさみ出す大きなハサミ、鎚は其の赤燒の金屬をたゝくツチのこと。以上の二つは鍛冶屋の道具。』――向上の鉗鎚云々は、向上の事に關する學人接得の法、云ひ換へれば學人の爲に師家が絶對的の活手腕を揮ふこと。』

提講。「定乾坤句」とは如何なる句を云ふか。例せば趙州禪師の無、――無業禪師の漠妄想、――雲門禪師の關の如きがそれである。恁麽の一言一句、縱に三際を貫き、横に十方に通ず。故に三世の諸佛、歷代の祖師と雖も、未來永劫ともに違ふのみ。決して違反することは出來ぬ。』茲で云ふ乾坤を定むる一句は、本則の洞山禪師、何不向無寒暑處去、と云ふそれである。此の句は可謂、萬世共遵の絶妙好辭と。――而して學人を接する其の活作略、「擒虎兒機」は寸分も手元を見せぬ。――凡そ師家と云ふ師家には各々特種の家風あり。三明六通の三世諸佛と雖も窺ひ知るを許さず。許さずではない、窺ふ能

はずである。――　衲にも衲だけの一家風あり釋迦でも達磨でも窺ひ知ることは出來ぬ。――　見よ學人接得の活手段底を。

「直下無纖翳、全機隨處彰。」――　十日並べ懸けて乾坤を照す如き心鏡を開き、千萬重の華山を分破するに似たる手腕を以て、如何なる場合にも如何なる時節にも、全体擧揚し來つて學人の爲に横拈倒用さるゝその有様は、さながら獅子の如きである。」聞く、獅子は大象を殺すにも全力を出し、小兎を擊つにも全力を盡すと。それ、それに似たりである。」――　聞く、世間一般、何事に限らず全力を振ひ全力を盡したる人は必ず成功、是に反し全力を出さず全力を盡さゞる人は必ず失敗すると。」果して然

らば學人の胸中に深く銘すべきは、全力を出し全力を盡す、と云ふことである。――

「要明向上鉗鎚、須是作家爐鞴。」鉗鎚は師家が學人を接得する活手段。――　爐鞴は師家が學人の知解分別妄想を燒却する場處。」言を換へて云へば、學人の鈍鐵を師家の爐鞴に入れ、十分熔解し、それを鉗鎚にかけて、名器となすのである。師家が英靈の漢を接得して佛祖の惠命を後世に綿々たらしむる、それに比したものである。」「且道云々。」古來かゝる偉人があるか。ある〳〵、本則の洞山禪師の如きがそれである。親しく參じて知るべし。

◎本則

舉、僧問洞山、寒暑到來、如何廻避、山云、何不向無寒暑處去、僧云、如何是無寒暑處、山云、寒時寒殺闍黎、熱時熱殺闍黎、』

讀方

舉す。僧洞山に問ふ、「寒暑到來、如何が廻避せん。」山云く、「何ぞ無寒暑の處に向つて去らざる。」僧云く、「如何なるか是れ無寒暑の處。」山云く、「寒時は闍黎を寒殺し、熱時は闍黎を熱殺す。」

「洞山」此の洞山は守初禪師ではありません。良价禪師、悟本大師であります。此の禪師は唐順宗永貞二年（日本平城天皇大同二年）に生れ、唐宣宗咸通十年（日本清和天皇貞觀十一年）に示寂なされました。有名な會昌の佛敎大迫害の時は三十九才であつたと云ふ。釋迦如來より三十七代の祖師。曹洞宗の宗風を五祖禪師は、馳書不到家、と評して居られます。其の意は法は無性、從緣赴感、無不周で、どこまでも回互圓轉して盡きず。所謂、前にあるかと思へば忽焉として後にあり、蛇となつて叢に居るかと思へば龍となつて天に昇る、と云ふ大自在底が曹洞宗の宗風である。』――良价禪師の著に「五位」「寶鏡三昧」がある。一回拜讀しますれば其の大自在底がほゞわかりま

す。――――茲にちよつと五位を述べて見ませう(極めて簡單に)。偏中正、正中偏、正中來、偏中至、兼中到、以上の十五字を以て宇宙の眞理を說き盡します。其の十五字を更に縮少しますれば正と偏と兼との三位となります。偏と云ふは差別の事、正と云ふは平等の事、兼は差別にも平等にも片落ちせざる圓融の當體。中は申す迄もなく、差別とも平等とも說明の出來ぬ中道實相の妙。』詳細は他日に讓ります。

一日僧あり。來て良价禪師に問ふ、「寒暑到來、如何が廻避せん。」夏になれば金を鑠す如き熱さ、冬になれば全身凍傷する如き寒さ、此の寒暑雙苦を何れの處に遁れたものでありませう。』

是は借事問で、實は「生死到來、如何が廻避せん。」と云ふ心底であるかも知れぬ。(生死の中には迷悟、善惡、苦樂、是非、得失等の相對的が總て含有されて居る。)敢へて此の僧に限らず。お互も生死の兩頭に日々夜々迷悶して居るが、如何にして生死を廻避すべきや。』――――正成の如きは、單刀直入、「生死到來如何が廻避せん。」俊明極曰く、「兩頭俱截斷、一劍倚天寒。」兩頭にわたつたら煩悶。生に安住の出來ぬのは死を見るから。死に安住の出來ぬのは生に思ひをのこすから。元來生死一如、生も不可得、死も不可得、何れも無自性。――――畢竟比較すべき餘地なし。强ひて生死の比較を立て自ら苦悶する人が多い。』正成曰

く、「畢竟如何。」明極、大喝一聲。――茲に於て正成眞箇生死の兩頭を截斷された。故に首諾して湊川に赴く。』――洞山禪師は既に明極禪師の兩頭截斷底を實行なされた。山云く、何不向無寒暑處去と。無寒暑の處とは箱根か熱海か、――極樂か天國か、――否、自己胸中。平生無寒暑の處に安住して居らねば、箱根へ行つても熱海へ行つても、極樂へ行つても天國へ行つても、寒暑を廻避することは出來ぬ。――心頭を滅却し來れば寒暑の眞中に住しながら寒暑を廻避することが出來る。』問僧、恁麼の道理を知らず。（或は知りてか。）故に「如何是無寒暑處。」と。無寒暑の處が天地以外、宇宙の外にあると思う

て。』――無寒暑の處は、それそこに。脚下を照顧せよ。自己を返照せよ。生死の中に無生死の處がある如く、寒暑の中に無寒暑の處がある。――眞箇寒暑の中に無寒暑の處あることを知り、生死の中に無生死のあることを知らば、生も愉快、――死も愉快、――寒も暑も亦復愉快である。』――山云、「寒時寒殺闍黎、熱時熱殺闍黎。」是が寒暑を廻避すると共に生死を脱出する方法。――讀んで字の如く、寒の時は寒になりきるべし。熱の時は熱になりきるべし。（闍黎とは君又は貴殿と云ふ意。寒殺熱殺とは三昧又は一心。）口では輕々に語り得ると雖も愈〻其の場に臨むと容易になりきれぬ。――修養の必用、錬

磨の功能は茲にあり。――是非一回大死一番せざるべからず。大死一番せざれば、萬象の裡獨露身となる能はず。獨露身とは乾坤只一人。――只一人の境界が我が手に入らざれば寒殺熱殺の妙處が知れぬ。――妙處が知れねば清風明月の境に遊ぶことが出來ても鑊湯爐炭裡に安住することが出來ぬ。』――聞かずや、眞偽を掩はず、曲直を藏さず、と云ふことを。――

◎頌

垂手還同萬仞崖、　正偏何必在安排、　琉璃古殿照明月、　忍俊韓獹空上階、』

讀　方

垂手還萬仞崖に同じ。正偏何ぞ必ずしも安排在らんや。琉璃の古殿は明月に照さる。忍俊たる韓獹は空しく階に上る。』

垂手は手を垂れて人を引起し又は人を救ふこと。』

正偏は詳細に說明しがたし。强ひて略中の略を語れば左の如し。宇宙の絕對的方面を(平等)正となし、宇宙の相對的方面を(差別)偏となし、此の正と偏との上に五位と云ふ學說を立て、總てを研究するのである。』

安排は安置、排列で、物を行儀よく並ぶること。』

琉璃古殿は洞山大師自家の境界。』――

忍俊韓獹は意志の强い怜悧の犬。――戰國策に出て居る古

事。齊が魏を伐たうとした時、淳于髡と云ふ人が齊王に謂うた言葉に、韓子盧者、天下之疾犬也、東郭逡者、海内之狡兎也、韓子盧逐二東郭逡一、環レ山者三、騰レ山者五、兎極二於前一、犬廢二於後一、犬兎俱罷、各死二其處一、田父見レ之、無二疲勸之苦一而擅二其功一、と。

以上總括して提講を試みませう。

第一句は洞山大師、爲人度生の活作略。――一手擡、一手搦。手を垂れて子供を導く其の中に萬仞懸崖、如何なる人も近傍し得ざる處がある。故に圜悟禪師、下言して曰く、「是れ作家にあらざれば誰か能く辨得せん。」――問僧の如き不作家では辨得することは出來ぬ。又曰く、「王勅己に行はれて諸侯道を避く。」何人と雖も背くことは出來ぬ。洞山禪師の云はるゝ通り、寒の時は闍黎を寒殺すべし、熱の時は闍黎を熱殺すべし。それでよし〳〵。第二句は洞山大師敢へて分別思慮を弄せず、自然のまゝ任運從容、從容任運。――何ぞ必ずしも安排あらんや。』――圜悟禪師一言を下して曰く、「若し是れ安排せば何處にか今日あらん。」安排せざる處に眞箇の價値がある。故に學者たる者もアアかカウかと安排して洞山大師の眞意を知らんと欲せば到底目的は達せられぬと知るべし。』――その安排せざる端的底、試みに擧す看よ。風行けば草偃し水到れば渠成る。第三句の琉璃とは何ぞや。古殿とは作麽生。一點塵埃を留めず古色蒼然

たる處が洞山大師の本地の風光。』――――圜悟禪師曰く、圓陀々地、と。――――洞山大師答話の無缺無餘、圓轉滑脫の處は實に美事々々。』されど學者、圓陀々地たる月に見とれ、自己掌中の玉を失却してはならぬ。結句、掌中の珠を失却した忍俊韓獹空しく階に上る。月の影にだまされて古殿へ上つたが、(犬が兎を逐ふと云ふことがある。月は兎。)兎は居らぬ。骨折り損。――――圜悟禪師、注意して曰く、「是れ這回のみにあらず。」今に限つたことではない。是より以後もあること。――――問僧はお氣の毒。塊を逐ふ犬の如く蹉過し了りぬ。』お互は問僧の覆轍を踏まず、別に活路を開き、寒の時は寒になり、熱の時は熱になるべし。

(昭和十三年五月二十一日講演)

第四十四則　禾山解打鼓

◎本則

舉、禾山垂語云、習學謂之聞、絕學謂之鄰、過此二者是爲眞過、僧出問、如何是眞過、山云、解打鼓、又問、如何是眞諦、山云、解打鼓、又問、即心即佛不問、如何是非心非佛、山云、解打鼓、又問、向上人來時如何接、山云、解打鼓、』

讀方

舉す。禾山垂語して云く、「習學之を聞と謂ひ、絕學之を鄰と

謂ひ、此二つの者を過るを、是を眞過と爲す。」僧出でゝ問ふ、「如何なるか是眞過。」山云く、「解打皷。」又問ふ、「如何なるか是眞諦。」山云く、「解打皷。」又問ふ、「即心即佛は即ち問はず。如何なるか是非心非佛。」山云く、「解打皷。」又問ふ、「向上の人來たる時如何が接せん。」山云く、「解打皷。」

提講。禾山は吉州の禾山大智院の無殿和尚のこと。法系は青原行思、石頭、藥山、道吾、石霜、九峰、禾山と云ふ風になつて居ります。』聞く、雪峰山の眞覺大師に就き出家、――生年月日は傳はつて居りません。雲門文偃、法眼文益、鏡淸道怤等と同時代の人ならん。――

此の則には垂示がありません。本則に禾山垂語とある處から或は垂示を略したものならん、と或人は云ふ。』而して垂語の文句は肇法師の寶藏論にあると云ふことであります。（衲は寶藏論なるものを拜見せしことなし。）井上君の說に依れば、「佛敎修行の順序を三段に區分して說明した時に使用した文句。――習學とは、幼稚園、小學校、中學校、高等學校、大學と云ふ風に順序を逐うて研究すること。――絕學とは、その習學によつて得た知識（聞）を一切抛擲して無爲の閑道人になり、習學の臭氣を一切脫したる境界。――鄰とは大悟の隣で、准大悟の意なり。眞過とは即ち正大悟（佛）の境界なり。」と。以上は經家

尋常の所談で敢へて珍重するほどのことはない。されど平意に説明された處は敬服の外なし。――禾山禪師が經家の閑言語を拈出し來つて祖師門下直指單傳の資料となされた活作略底は青天の霹靂。――故に圜悟禪師、絶學の下へ、天下の衲僧跳不出と喝破なされた。――我こそはと、唯我獨尊を氣取つて居る衲僧も、これは容易に跳出することは出來ぬぞ、と。』果して然るや。實參實悟して知るべし。――眞過の下に、圜悟禪師、一隻眼を具して什麽をか作さん、と云ふ。其の意は、習學絶學以前ならばともかく、既に習學絶學以後、眞過とは何たる無駄ごとぞ。如何にも如何にも。僧、出でて問ふ、(此の僧、頂門上に一隻眼を具したつもり、)「如何是眞過。」眞過は説明できぬ。強ひて云へば囚地一聲。――此の道理を知つてか知らずにか。知つてゐたら問はぬ。知らぬが故に問うた。――諸君、人あり來つて如何なるか是れ眞過と問はば、何と答ふべきや。答へざれば他の所問に背く。妄りに應ずれば眞過を害す。サア如何にすべきや。――山云、「解打皷。」此の解打皷につき井上君は左の如く云うて居らるゝ。此の僧は禾山の大智院で太皷打ちをして居ながら、未だ上手に太皷の打てぬくせに、自分の本職をそつちのけにしておいて、無暗に哲學的議論を好んで、自分で高尚がつて居たものと見える。故に禾山和尚が、「打皷を解せよ。」

と。――――或は然らん。普通は、禾山和尚、太鼓の音を聞いて大悟なされた故に、「拙僧は太鼓を上手に打つぞ。」と。――――何れにせよ太鼓を打つことである。太鼓を打つことが眞過とは抑〻如何に、と問ひたくなるが。――――禾山和尚の解打鼓に對して、圜悟禪師云く、「鐵蒺藜。」又云く、「鐵橛。」齒がたゝぬ。――――寄り付かれぬ。――――實際寄り付かれぬ。齒がたたぬ。然らば如何せば可ならん。云く、「解打鼓。」――――又問ふ、「如何是眞諦。」眞過と云ふも眞諦と云ふも異名同體。敢へて眞諦とは俗諦に對しての名、眞俗不二、是を聖諦第一義と云ふ、なぞと閑妄想を弄する必用はない。――――衲ならば再來半文錢に當らずと云ふ處である。――――山云く、「解打鼓。」相かはらず、太鼓を上手に打つぞ。――――圜悟禪師も相かはらず、「鐵橛、――――鐵蒺藜。」齒がたゝぬ。寄り付かれぬ。――――解打鼓の一曲では如何にも興がなさすぎる。』

聞く、此の時代には即心即佛、非心非佛の研究が盛んに流行したと云ふ。――――即心即佛の本家、家元は(以前は知らず)馬祖大師と云ふことである。馬祖大師は頻りに即心即佛と提唱なさる。それを或人が、何のために斯く云はるゝや、と問うたら、小兒の啼を止めんが爲め、と答へられた。そこで更に、小兒の啼が止んだ後は如何に、と問うたら、非心非佛と云はれた、と

あります。――故に故大内君は舌頭禪を擧揚して云く、「佛と云ふものが別にあるやうに思うて居る小兒、(敢へて小兒に限らず、) 即心即佛即ち吾々お互の心の本性が佛であつて其の外に佛は無い、と聞けば、一旦その啼は止むであらうけれども、更に其の即心即佛と云ふことに取りついて自由がきかぬから、そこで今度は、非心非佛、と心佛共に拂ひのけるのである。問僧、眞過と問うても眞諦と問うても、一本調子の解打皷で取りつく所がないから、更に非心非佛の問題を提出した。」と。或は然らん。――圜悟禪師、非心非佛の下へ、「什麽と道ふぞ。」マダその樣なことを繰返して居るか。三段同じからず。眞過、眞諦、非心非佛と問端を改めたは御苦勞々々々。

禾山禪師は所謂、風吹けども動ぜず天邊の月、相も變らず解打皷。――又問ふ、「向上の人來たる時如何が接せん。」私如き凡僧であるから、太皷をよく打ての、太皷を打つことは上手だ、なぞと茶化して御座るが、向上の眼を具する破衲子が到來した時はサア何と應對なさる。例の解打皷ではありますまい。――處が相變らず、「解打皷。」――圜悟禪師の下語も前と同じ。最後に什麽の處にか落在す。』畢竟解打皷はどこで終了か。――解打皷の終りはない。――終りがあつたら野狐の解打皷。――僞物、――――贋物。――圜悟禪師は、朝に西天に到り、

暮は東土に歸る、と。是が圜悟禪師の解打皷。――

諸君の解打皷は如何に。――――衲は云はじ、云はじ。是が衲の解打皷。――――修行者の着目すべき處は解打皷の三字。――――云ふこと勿れ、我に解打皷の用なしと。人間萬事解打皷ならざるなし。老倒無端入荒草。』――

◎頌

一拽石、二般土、發機須是千鈞弩、象骨老師曾輥毬、爭似禾山解打皷、報君知、莫莽鹵、甜者甜兮苦者苦、』

讀方

一には拽石、二には般土。機を發せば須く千鈞の弩なるべし。

象骨老師曾て毬を輥ず。爭でか似かん禾山の解打皷に。君に報じて知らしむ、莽鹵なること莫れ、甜きものは甜く、苦きものは苦し。

一拽石より苦者苦に至る迄、雪竇禪師の解打皷。』禾山禪師の解打皷と是れ同か是れ別か。――――可謂、虎に似て双角多く、牛の如くにして鼻巴を缺く。』――――解釋しながら提講を致します。「一、拽石、」の拽石は石を拽くことであります。歸宗禪師、一日曾請して石を拽く。宗、維那に問ふ、「什麽の處に去るや。」維那云く、「石を拽き去る。」宗曰く、「石は汝が拽くに從す。中心の樹子を動着することを得ざれ。」と。是が一拽石の由來。』

「二般土。」是は木平の故事。凡そ新到あり、至れば先づ三轉の土を運ばしむ。頌あり、示衆して曰く、「東山路窄西山低、新到莫辭三轉泥、嗟汝在途經日久、明々不曉却成迷、」と。或時、僧あり問ふ、「三轉の内は即ち問はず、三轉の外作麽生。」平云、「鐵輪天子寰中勅。」僧無語。平便打。『――故秋野師、茲の處へ落草して云はれた。即ち禪宗は坐禪をして居る時ばかりが修行ではない。石を拽くのも草を刈るのも水を汲むのも柴を搬ぶのも佛法修行と心得ねばならぬ。』道元禪師は、「作法是れ宗旨、威儀即佛法。」と示された。一切の普請作務が皆是れ佛法と説かれてある。』禾山禪師、曾て九峰の處へ修行に行かれたとき、九峰云く、「お前は辛抱して勤めて居れ。心要の法門を説いてやる。」と。三年も默つて勤めて居るに一向に心要の法門らしきものを説いて聞かせて下されぬから、「どうしてお説きにならぬか。」と聞いたら、「いや毎日説いて居るではないか。お前がお茶を持つて來ればそれを受けて飲む。御飯を持つて來れば合掌して受ける。其の外に何の心要の法門があるぞ。」と云はれたと云ふ話がある。禪宗では總て此の心得がなくてはならぬ云々。』有難き説法である。以上の一拽石二般土、それぞれが大乘の法門にして禪の心髓である。所謂、勞働は神聖なりである。次の句の「發機須是千鈞弩。」機は、云ふ迄もない、心の上のはたら

き。――　千鈞弩は、古句に、千金の弩は鼷鼠の爲に發せず、とある強い猛獸を捕ふる時に用ふ。』それの如く今禾山禪師、佛見法見を離れ上根上機の人を接する手段は、天子の勅の如く將軍の令に似たる活機輪を轉ぜらるゝ。その有樣を、發機須是千鈞弩、と吟出されたのである。果して問僧が强き猛獸、上根上機の人でありしか。――　されど雪竇禪師は禾山禪師の胸中を忖度して斯く云はるゝのである。お互も宗師家から千鈞の弩を向けらるゝ樣な上根上機の人とならねば三度の飯は喫せぬがよい。――「象骨老師曾輥毬。」雪竇禪師の居られた山を象骨山と云ふ。山の形が象の背に似て居つたと見えます。雪竇禪師學

人を接するに、必ず木毬を輥らして其の機根を勘檢するのが常法である。一日、玄沙の來るを見て三箇の木毬を一齊に輥らす。』可謂、無孔の鐵鎚と。手のつけ處がない。――されど禾山禪師の解打鼓は禾山禪師の獨り舞臺。勝手に踊るべし、隨意に謠ふべし。三世の諸佛も歷代の祖師も此の解打鼓に會つては倒退三千。――「報君知。」是は雪竇禪師の解打鼓。――　圜悟禪師曰く、「一子親しみ得たり。」流石雪竇禪師だ。太鼓の打ち方を合點された。――　試みに雪竇禪師の打たれた太鼓の音色を諸君のお耳に傳へませう。「莫莽鹵。」えいころ加減にして置くこと勿れ。――　草卒にしてはならぬぞ。參は須く實參なる

べし。粗嚼は飢ゑ易し、細嚼は飢ゑ難し。――仔細に參究すべし。萬古碧潭空海月、再三撈摝始可得。――敢へて此の公案に限らず、何れの公案も輕々に思うてはならぬ。お互の平生底、それ〳〵に莫莽鹵。――如何に實參すべきや。「甜者甜兮苦者苦。」――何だ、それしきのことか、それなら我等は父母未生以前から承知して居る、と云ふ勿れ。云ふは易く、行ふは難し。』――四の五の云はずに何事にも徹底すべし。――徹底し去り、徹底し來る、そこに眞箇甜者甜兮苦者苦の妙味がわかる。諸君、試みに禾山禪師の解打鼓に徹底し看よ。――サア――サア――云ふまいぞ、トン〳〵すとんとん、と。――

（昭和十三年六月十一日講演）

第四十五則　趙州七斤布衫

◎垂示

垂示云、要道便道、擧世無雙、當行卽行、全機不讓、如擊石火似閃電光、疾焰過風、奔流度刄、拈起向上鉗鎚、未免亡鋒結舌、放一線道、試擧看、』

讀方

垂示に云く、道はんと要すれば便ち道ふ、世を擧げて雙び無し。行ずべきに當つては即ち行ず、全機讓らず。擊石火の如く閃電光に似たり、疾焰過風、奔流度刄、向上の鉗鎚を拈起

するも、未だ免れず鋒を亡じ舌を結ぶことを。』一線道を放つて試みに擧す看よ。』

要道とは必用の場合に。――　擧世とは世界中。――　不讓とは遠慮なしに。――　疾焰とは燃えたつて居る火焰。――　奔流は急流のこと。度刄は振りまはして居る刄。――　向上鉗鎚は活作略、活方便。――　亡鋒結舌は手も出せぬ、口もひらけぬ。――

提講。衲は淺學薄識、且つ咄辯。故に道はんと欲して道ふ能はず。依つて井上君と飯田師の高說を拜借致します。井上君曰く、「苟も禪の一つもやつて居る人物は、何か思想を發表したい時には躊躇せずにどし〳〵發表し、擧世無雙の活辯を揮ひ、何か實行すべき時には即座に實行して何の遠慮もなくそれに全活力を傾注し、擊石火、閃電光の如く機敏に活動しなくてはならぬ。併し疾風の如く過風の如く奔流の如く度刄の如く向上の鉗鎚を拈起しても、鋒鋩を折られ口舌を奪はれ一杯喰はされることもあるからよほど注意せねばならぬ。」と。――

飯田師曰く、「碧巖錄中に趙州は十二回登場して居らるゝが、中に就いて最も越格なるは此の則である。趙州の禪は何時も云ふ通り唇皮禪、口の先で如何なる英傑でも自由に扱うて痛處に針錐を與へたものぢや。そは只舌頭骨なきが爲のみぢや。雪

寶の所謂、孤危不言道方高、と云ふのはこゝぢや。この故に趙州錄は五家七宗の外に卓出して貴きが上の貴き價がある。或僧、曹山に問ふ、何物か最も貴き。」山曰く、死猫兒頭、最も貴し。人の價をつくるなきが故に。』孔子、老子を評して云く、良賈は深く藏して虛なるが如く、君子は盛德あつて容貌愚なるが如し。』以て趙州の一端を評するに足らんか。この則の如きは先づ心を虛にし淸く平かにして讀まねば、とてもその境致を窺ふことは出來ぬ。」と。――以上の兩說に依れば一は趙州禪師その人にかけ、一は學者その人にかけてある。されど必ずしも趙州禪師にかけ、學者その人にかくることはない。寧ろ自己自身にかけて見るも敢へて不可なし。否、不可なしではない。それが本當である。――要道のときは相手の何者たるを問はず自己の確信に任せ、舌頭骨なく堂々心肝五臟を吐露し去る處に擧世無雙の靈妙が發展する。――行ずべきに當つては、自他の差別を見ず靈乾坤となり全宇宙となり、徹底的に一擧一動をなす。そこに全機不讓と云ふ神光が顯現する。その全機不讓、擧世無雙の當體を如擊石火似閃電光――疾焰過風奔流度刄と云ふ。――されど上には上がある。如何に向上の鉗鎚を拈起すると雖も未だ免れず鋒を亡じ舌を結ぶことを、で、問僧が趙州禪師の青州云々に逢着したるが如く、猫に

袋で、速去するより他に道なきことがある。――趙州禪師と雖も趙州禪師に數等優りたる趙州禪師に遭遇すれば亦復同樣ならん。と云ふものゝ茲は趙州禪師の獨り舞臺。――サア開幕一番するから諸君、近前來。――心眼を開いて見るべし。

◎本則

舉、僧問趙州、萬法歸一、一歸何處、州曰、我有青州作一領布衫、重七斤、』

讀方

舉す。僧、趙州に問ふ、「萬法一に歸す、一何れの處にか歸す。」州曰く、「我青州に在つて一領の布衫を作る。重きこと七斤。」

萬法は讀んで字の如く萬法。宇宙の總てを佛敎では萬法と稱す。言ひ換へれば、天の天外、地の地外、盡十方界、それらの中間にある一切の物を包含しての句である。――歸一は是又字の如く別に說明のしやうはない。――古歌に、雨あられ雪や氷と隔つれど、落つれば同じ谷川の水。』――豆や麥、鹽や糀と隔つれど、なるれば同じ樽そこの味噌。』――古語に、貴となく賤となく同じく枯骨となる。』――又、千溪萬岳歸滄海、四夷八蠻朝帝都。』――布衫は麻で作つた衣。

趙州禪師の處へ或一人の僧が多少の知解學識を擔うて來て、「萬法は一に歸す。――儒敎では大極に歸すと云ひ、――

キリスト教では獨一眞神と云ひ、――佛教では眞如とか法性とか又は菩提とか涅槃とか、或は法身、妙心、主人公、本來の面目、本地の風光、那一物、那一句なぞと種々樣々に名目が下してある。こゝまでは理解も出來るし說明もなし得らるゝが、サア――それから後は畢竟如何。一、何れの處に歸す。萬法一に歸したる其の一はどうなります。」と趙州禪師にせまつた。――圜悟禪師は玆の處へ著語して曰く、「拶着這老漢。」と。老漢は趙州禪師を指す。問僧、能く趙州禪師を問ひ詰めた、デカシタ〳〵、と圜悟禪師は問僧を使嗾して居らるゝ。若し人あり、此の圜悟禪師に向つて「萬法は一に歸す。その一は何れの

處にか歸す。」と問はば、圜悟は堆山積岳と答ふるぞ、と闇に一線路を通じて御座る。諸君おわかりか。――尋常一樣の師家であれば、一、何れの處に歸すや、と問はるれば、口、壁上に懸く、で如何ともなす能はず。流石、趙州禪師、例の唇皮禪を以て輕々に答へて曰く、「我在青州作一領布衫重七斤。」――拙僧はなア青州に居た時に一枚の麻布の法衣を作つた。其の重さは七斤ほどあつた。――これは萬法と云ふことか。歸一と云ふことか。佛法か禪道か。將亦世法か邪法か。戯論か暴談か。――故大內君は此の處へ例の唇皮禪を弄して曰く、「佛法とか禪道とか、其のやうな臭い匂のある理窟や議論は無い。――

此の趙州禪師は、曾て人あり、如何なるか是れ西來意と問うたのに答へて、庭前の柏樹子と言うたことがある。前則の禾山の解打鼓と同樣で、とんと手のつけやうの無い鐵橛子である。決して口舌を以て説明することの出來るものではない。」と。——されど決して説明することの出來るものでないと云はるゝのが既に説明して御座るではないか。——依つて衲は思ふ、此の決して口舌を以て説明することは出來るものでないと云ふそれが、或は一何れの處にか歸すと云ふ歸着の場處ではあるまいか。否、然らず。齊一變せば魯に至り、魯一變せば道に至る、道一變せばサア何となる。一の裏は六、六の表は一。是が分明にお

手に入らば、一何れの處に歸す、と云ふ落處も分明になります。』——

圜悟禪師は、趙州禪師の「我在青州作一領布衫、重七斤。」と云はれた處へ下言して曰く、「果然として七縱八横。」——「かくあらうと思うて居つた。流石は趙州禪師だ。口舌を以て説明なしがたき處に向つて無口の口を開き無舌の舌を揮はれた。——法に於て自在のものだ。道に對して自由なものだ。」と。——禪師を托上されたが、其の實或は自己を托上したのではなからうか。——重ねて曰く、「漫天の網を拽却す。」「趙州禪師の我在青州云々は漫天（滿天）の網となつて盡乾坤、全宇宙

の總てを引き包んで居る。」と。――如何にも御說の通り趙州禪師の當時より昭和の今日に至るまで、幾百千萬億の修行者が是が爲に四苦八苦して居る處を見れば事實漫天の網である。』試みに趙州禪師に問ふ、「禪師は網の外か網の內か。」――一何れの處に歸す、と云ふ一の歸着點から洞觀し來れば、外の時は森羅萬象も共に外、――內の時は凡聖含靈共に內。――豈趙州禪師獨り除外する道理あらんや。云ふ勿れ、「一、萬法に歸す。」と。――

◎頌

編辟曾挨老古錐、　七斤衫重幾人知、　如今抛擲西湖裏、　下載清風付與誰、』

讀　方

編辟曾て挨す老古錐。七斤衫の重さを幾人か知る。如今抛擲せり西湖の裏に。下載の清風を誰にか付與せん。』

「編辟とは日本の俗語の屁理窟、又は生意氣と云ふことに當る。」と井上君は云うて居らるゝ。如何にも適當したるお說である。衲も共鳴致します。』――挨は云ふまでもなく質問したことである。――老古錐は使つて古くなり今は何の役にもたゝぬと云ふこと。されど玆では老練家、老熟と云ふ意味に用ふ。云ひ換へれば老先生、老禪師、老大師と云ふこと。』――下載

は順風のこと。東南の風を上載と云ひ、西北の風を下載と云ふ、とあります。是は揚子江の地理に依つたもの。衲は揚子江の地理を知りません。書物には舟に荷物を載せて河上へ上るのを上載と云ひ、其の荷物を卸し空舟になつて河下に往くを下載と云ふ、とあります。簡單に云へば重荷を卸して樂々したと云ふほどのことなり。』――

提講。聞く、編辟は汾陽禪師の十八問の其の一なり、と。此の編辟の二字を故大内君は左の如くに云うて居らるゝ。「編は字の如く物をアムこと、辟は逼の字と同じ意味でツメヨセルこと。草鞋を作る時に草を段々とツメヨセルことを編辟と云ふ。乃ち萬法を一に編辟して更に其の一は何れの處へやる、と段々に詰め寄せたアンバイぞ。」とある。大内君は流石に老古錐、文字禪を弄するに於ては第一流者である。本則の萬法云々に對しての說としては妙である。』――或僧が萬法を編辟し來つて趙州禪師に問うた。趙州禪師は老古錐だ。所謂轉、不轉の處に向つて轉じ、動、不動の處に於て動ず、で、他人の如何ともなし得ざる難問に對して何の苦もなく我在青州云々と答へられた。――其の七斤の重さを知る人が何人ある。』――飯田師は問僧と趙州禪師の商量底を評して曰く、「丁度辨慶が大薙刀を以て微塵になさんと切込みし如き勢の問僧に向つて、俺は年が寄つ

たから曾て青州で求めた上着が七斤ばかりだが今ではそれが重いわい、と何の造作なく云はれたところは、丁度牛若丸が扇子を以て受けとめて ヒラリと身を かはしたやうだ。」と。――

――圜悟禪師は雪竇禪師の七斤衫重しと云ふ處へ、再來半文錢に直らず、と著語なされた。如何にも同じ品を再び持ち出されては買ふ人はありません。されど、一回擧着すれば一回新なり、と云ふこともある。品によつては見れば見るほど見でがあり、聞けば聞くほど聞きでがある。――趙州禪師、あなたには七斤の衫布が御入用かも知れぬが、此の雪竇には不必用でありま

す。依つて左樣な猿曳道具は西湖に抛擲、投げすてゝしまひました。その理由如何。かの僧が一何の處にか歸すと云ふ向上の問題を振り廻してきた、それを布衫の重さ七斤と拂はれた趙州禪師の超宗越格の手段は價千金。――されど其の超宗越格の處に腰を据ゑたら所謂尊貴墮、――水を避けて火に入るも同樣。故に明月、清風を拂ひ、清風、明月を拂ふと云ふ立場から、惜し氣もなく西湖へザブリと捨てた、如今抛擲西湖裏。――此の處が雪竇禪師爲人の大機大用にして雪竇禪師の雪竇禪師たる處である。――圜悟禪師も雪竇禪師の活手段に共鳴して曰く、「捨てる捨てないも雪竇禪師のお勝手。――山僧もまた要

せず、此の圜悟も七斤の布衫なぞには用はない。」――――いかにも〳〵。佛見だの法見だの、生死だの涅槃だの、今時だの那邊だのを一切放下した其の時の愉快さ、――――其の時の氣樂さ。風に任せて何の障りもなく帆をあげて流れに隨つて本分の本家郷に歸る絶好の靈境は唯自知するのみ。佛祖と雖も窺ひ知る能はず。況んや其の他の人に於てをや。夢にだも見ることは出來ぬ。――――出來るものなら恁麽の妙味を分けてやりたい。此の事ばかりはさうは出來ぬ。』「世の中に錢金も米も寶も何もかも與へてあるぞ、せい出して取れ。」畢竟如何。坐禪せよ坐禪せよ。坐禪すれば自然に我ものになる。聞かずや、誰が家にか明月清風なからん。――――清風明月のなき處があるか。――――盲目者之を見ず。聾者は之を聞かず。――――諸君、盲者となる勿れ。聾者となる勿れ。――――心眼を開き、心耳を開き、自修、自得、自證せられよ。――――參。――――

（昭和十三年六月二十五日講演）

第四十六則　鏡清雨滴聲

◎垂示

垂示云、一槌便成、超凡越聖、片言可折、去縛解粘、如氷凌上行、劍刃上走、聲色堆裏坐、聲色頭上行、縱横妙用則且置、刹那便去時如何、試擧看、』

讀方

垂示に云く、一槌に便成して、凡を超え聖を越え、片言に可折して、縛を去り粘を解き、氷凌上に行き、劍刃上に走り、聲色堆裏に坐し、聲色頭上に行く、縱横なる妙用は則ち且く

置く。刹那便去の時如何。試みに擧す看よ。』

「槌」は禪家(他宗も用ふ)で法式の時に使用する一の道具。印度以來の鳴物が鐘だの大鼓だの色々ある其の中で最も古風の鳴物であると云ふ。柱大の木を四尺位に切斷し高さ凡そ一尺餘、それを八角形に作つたもの、その上を叩くそれが槌であります。實物は禪家に行つて實驗せらるべし。』――「便成」の便は辨と同じ、なし得た、――やりおほせた、――かたづけた、――と云ふ意である。』――「可折」は可決のこと、きまる、と云ふ心。』――「去縛解粘」自由を邪魔するもの、自在を障碍するものは、迷ひは元より悟りも、生死も涅槃も、煩惱も菩

提も一切去り除くこと。』――「縱横妙用」は説明の必用なし。或人は、如と云ふ字は氷凌以下十八字を一括したものと云はるゝが、衲は如の一字を取り去ります。――「刹那便去」は四字聯續させて意味を取るべし。二分しては意味を失します。其の意は火急の場合、意外の時、と云ふ位のこと。――

提講。苟も禪僧と云はるゝ者は、一槌便成、コツンと白槌を鳴らされた其の一聲で超凡越聖が出來なければ、眞箇の禪僧とは云はれぬ。』例せば世尊上堂、文殊白槌して云く、諦觀せよ諦觀せよ、法王の法は如是。玆に於て世尊下坐。』――以て白槌の眞意義を知るべし。されど、諸君は禪僧でないから我が事に非ずと思うてはなりません。全世界、總ての人の共有である。古今東西、一槌下に於て大事を成就なされた其の人、枚擧に遑あらず。――知るべし、一槌下に大悟徹底、即時如來地に到達なされた其の人は如何なる疑難、――如何なる諍訛（がうくわ）に會ひ、それに當つても、多言を用ひず片言以て刹那に快斷なさる。見よ、或は一指、或は一喝、又は一拂、其の容易に縛を去り粘を解くこと、巨靈人が手を擡げずして大華山を粉碎するが如しである。然り而して學者を接し迷人を度する、其の作略（さくりやく）、其の手段としては、氷凌上にも行き、劍刃上にも走る。是れは所謂唯他の境界、他あることを知つて自己あることを忘るゝと云ふ

境致。――――三界の大導師、下化の菩薩でなければ出來ぬ。』

然るに野狐禪者流は僅かに一知半解を得て猥りに禪風を吹かし禪機を振り、氷凌上何のその、劍刄上何事かあらん、と云ふ舌の根の未だ乾かざるに、氷が破れて水の中に落ち、劍に足を斬られて即死。――――實に笑ふべし、實に氣の毒。』――――三界の大導師、下化の菩薩は、氷凌上に行き劍刄上に走ると共に聲色堆裏に坐し聲色頭上に行かるゝ。實は聲色のみに非ず香味觸法も亦復然りであるが、今は聲色の二を擧げて其の餘は略しました。』簡單に云へば、下化の爲には如何なる處へも隨緣赴感、嫌はず選ばず慈悲の手を垂れて行きもすれば坐しも致します。

されば證道歌にあるが如く、欲(欲界のこと)に在つて禪を行ずるは知見の力なり、火中に蓮を生ず終に壞せず。そのものそれに惑溺はしない。』――――然るに相似禪の漢は、色界に入つて其の色に溺れ、聲界に入つて其の聲に溺れ、香界に入つて其の香に、味界に入つて其の味に、觸界に入つて其の觸に、法界に入つて其の法に。之是を自救不了と云ふ。世間恁麽の漢少からず。』――――何れにせよ一槌便成、片言可折の人は、唯自に處しても四通八達、出沒縱横の無礙自在なることは云ふに及ばず。』――――それはそれとして、刹那便去、火急の場合、意外の時、サア如何に人を敎化するや。如何に人を濟度せらるゝや。本則に實參

して知るべし。――

◎本則

舉、鏡清問僧、門外是什麽聲、僧云、雨滴聲、清云、衆生顚倒迷己逐物、僧云、和尙作麽生、清云、洎不迷己、僧云、洎不迷己意旨如何、清云、出身猶可易脫體道應難、』

讀方

舉す。鏡清、僧に問ふ、「門外は是れ什麽の聲ぞや。」僧云く、「雨滴聲なり。」清云く、「衆生は顚倒して己に迷ひ物を逐ふ。」僧云く、「和尙は作麽生。」清云く、「洎ど己に迷はず。」僧云く、「洎ど己に迷はずとの意旨如何。」清云く、「出身は猶ほ可易き

がごときも、脫體に道ひ應ふることは難し。」

「衆生顚倒迷己逐物。」此の八字は華嚴經にありと云ふことである。其の意は、自己が一切事物の支配者であることを忘れ、主客顚倒、自己が外界事物の奴僕となること。――「洎不迷己。」己に迷はざるに達せり、やうやく主となることが出來た、と云ふ底。――「脫體」は具體的、――或は事實的。』――

提講。鏡清禪師の事は第十六則の處で一應申し述べておきました。雪峰義存禪師の法嗣で常に啐啄同時の機を使用なされた人。或日、雨の降つて居る時、座下の一僧に向つて、「門外是れ什麽の聲ぞ。」戶の外で何か音がして居る樣だが、あれは何であ

るか、と問はれた。鏡清禪師は雨の音なることは百も承知。然るに知らざるが如く裝うて、あれは何である、と家風の啐啄禪機を弄し、僧の胸中にも自性識得の時節方に到來せしことを直覺し、親鳥が卵をコツンと外からつゝくが如く當つて見られた。』――――僧云く、「雨滴聲。」――――ハイ雨だれの音であります。可謂、實頭の漢と。雨滴聲であるから雨滴聲と答へた。諸君、此の僧は雨滴聲と答へたが、迷ひか悟りか。悟りに非ず迷ひに非ず、只是れ雨滴聲。――――禪師は、僧が果して雨滴聲を我がものにして居るか居らざるかを試驗せんが爲に、衆生顚倒、己に迷うて物を逐ふ、と獨言なされた。』眞箇此の僧が雨滴聲を我がものにして居れば、衆生顚倒云々と云はれた、それにつき敢へて心配をする必要はない。』――――然るに「和尙作麽生。」と問ふに至つては、口を開いて膽をあらはすで、眞箇雨滴聲そのものの妙境に到達して居らざること顯然明白。』――――禪師曰く、「泊ど己に迷はず。」此の泊不迷己と云ふ句につき、異說が澤山あります。衲の如きは迷はざらんと欲して迷はざるを得ず。況んや、と云うては相すみませんが、諸君に於てをやであります。此の泊ど云々の句に就き、故人大內君が例の文字禪で述べて居らるゝから、一寸拜借して諸君の一覽に供します。

鏡清が自分のことを云うたと云ふ說と――――彼の僧を戒しめ

たのであると云ふ説とある。自然に不の字の訓にズとザレとザラントスとの三説が起るのである。鏡清自分のことを云うたと云ふことになれば、即ちズの訓又はザラントスの訓で、泊ど己に迷はズ、又は泊ど己に迷はザラントス。何れにしても我は全く己に迷はないとは云はぬが大抵迷はない、又は迷はないやうにするぞと云ふので、迷ひとも悟りとも窺ひのつかぬ所。是を垂示の聲色堆裏に坐して聲色頭上に行くと云へば云へる。』彼の僧を試したと云ふ方で見れば、泊ど己に迷はザレ、迷はぬやうにしろ、と垂示したことになる云々。』――――衲はズ、ザレ、ザラントスの三説の中では、鏡清禪師はザラントス、それであらうと思ふ。云ひ換へれば己に迷はざるに近し。――――されど泊不迷己と云はるゝから、ズと訓じて讀むべきか、ザレと訓ずべきか、或はザラントスと訓ずべきか、それが太だ不分明である。況んや其の意味に於てをや。僧が更に問ふは當然であります。――――問うて曰く、「泊ど己に迷はずと云ふ意旨如何。」と。――――玆に圜悟禪師が言を下して曰く、「前箭は猶輕く後箭は深し。」と。前に和尙作麽生と攻めたが、それより今度の矢が鏡清の胸に猛烈に當つた、と。』果して然るや否は鏡清禪師でなければ眞箇の處はわからぬ。』――――鏡清云く、「出身は猶易かる可し、脫體に道ふことは難かるべし。」大内君は「聲色以外に身を

出して悟りに落著くことは容易であるが、迷ひの、悟りのといふ場合を透りぬけて、脫體その儘に言ひ得ることは容易でないぞ、と非常に老婆親切の說法である。」と云はるゝが、如何なる處が非常に老婆親切の處であるぞ。大內君は圜悟の下言に依つて斯く思ひもし、云はれもしたのであらう。『――由來四の五のと言句を並べ閑葛藤を振廻すは禪家の親切に非ず、寧ろ不親切である。眞箇の親切は所謂、一棒、一喝。それでなければ出身も脫體も出來るものではない。――井上君は、「出身猶可易、脫體道應難。」と云ふ此の句の意味を、「人の前で、おれは己に迷はぬと云ふやうなことは造作もなく云へるが、さてそれは何の意味かと問はれると、實はそれを具體的に解答することは仲々むづかしい。」と。如何にも御說の通り、云ふことは易く、行ふことは難し。禪は實學にして實行すべきもの。言句や說明は無駄、無益である。鏡淸禪師が此の僧をして大悟せしめんが爲の親切、それが言句を弄せられたが爲に却つて悟得をして遲からしむ。――畢竟如何せば可ならん。曰く、雨滴聲。――雨滴聲そのものゝ當體には、顚倒も、物を逐ふも、泊ど己に迷はずも、脫體もあつたものでない。若し聊かでも雨滴聲中に其のものあらば雨滴聲に非ず。――之是を出身と云ひ、之是を脫體と云ふ。出身脫體、不二一體、一體不二。――雨につき衲

が胸に浮びしまゝを語つて見ませう。佛敎の中に、慈雲を敷き法雨を濺ぐ、と云ふことがある。歌に「火の中を分けても法は聞くべきに、雨風雪はもののかずかは。」と云ふのもある。是は或雲上の御方が暴風雨の中を大法聽聞の爲に濡れ鼠になつて參堂なされた其の時、說法敎主、「かゝる暴風雨にワザ〳〵御越しなさらずとも。」と申し上げたる處、「イヤ光陰は矢の如し、人生は朝露。雨が降るから風が吹くから、と云うて居つては、百千萬劫にも聽くことの出來ぬ甚深微妙の大法を拜聽することは出來ぬ。――大法を拜聽するには、」と云うて前に讀み上げました歌を差し出されたとあります。』

經に二十の難が說いてあります。其の中に人身は受け難し、佛法は聽き難し、とあります。然るに幸にも諸君、お互は受け難き人身を受け、亦聽き難き佛法を聽くのでありますから、雨や風を厭うて、寶の山に登りながら手を空しうして歸つてはなりません。實を云へば火の中も何のそのでなければなりません。――歌に「雨ふりに濡れて歸るや腐れ儒者、斐たる君子と誰か云ふらん。」是は或儒者が或僧を禪寺に訪問して、山雲海月の情を語り、雨の降り來るをも知らず長座致しました。辭するに當り、寺僧が、「君、雨が降つて居るから傘を。」と云うて傘を出された。――すると儒者、「是れしきの雨は、」と云うて傘

を持たずに門の下まで出かけたので、それを氣の毒に思ひ、是非とも彼に傘を持たせたしと思ふ親切心から、先に讀みました歌を傘に添へて出しました。歌の下の句に斐たる君子と誰か云ふらんとありますから、自己の面目を保つために不本意ながら傘を借用して歸りました。數日の後、儒者先生、傘に一首の歌を添へて返却。其の歌は「ありがたや御光の樣な傘借りて、後の方がちつと極樂。」蓋し借用の傘が破れてをつたものならん。

——雨ふつて地かたまる。——雨滴聲。——

◎頌

虛堂雨滴聲、作者難酬對、若謂曾入流、依然還不會、會不會、南山北山轉霧霈、』

讀方

虛堂の雨滴聲、作者酬對し難し。若し曾て流を入へすと謂はば、依然として不會。會不會、南山北山轉霧霈。』

虛堂は空堂のこと。——入流の二字は、經に、初於鬧中入流亡所、所入既寂、靜動二相、了然不生云々とあります。蓋し是に依りたるならん。』——南山北山云々は見渡す限り何處もかしこも雨ならざるなし。——霧霈は雨の降る音である。』

古寺のことを虛堂と云ふ(一說)。その古寺に雨のザア〳〵と降る音、それが「虛堂雨滴聲。」——虛堂につき飯田師は、自會、南山北山轉霧霈、』

己を忘じた此の肉體そのものの居る處が直ちに圓覺伽藍ぢや、無邊の刹境打通ぢや、それが雨滴聲となつてボト〳〵落ちる、聞くまゝにまた心なき身にしあれば、己なりけり軒の玉水、』と云うて居らるゝ。云ひ得て惡しからず。されど聊か思慮に亘れり。大内君は、虛堂は人の居らぬ空虛の家、外はドン〳〵雨の降る音がする、此の雨の音を誰も聞いて居らぬ、けれども雨はドシ〳〵降つて居る、此の間に迷ひも悟りも無い、』と云ふ。――是亦云ひ得て好し。飯田師は飯田師で雨滴聲を我がものにして云うた。――大内君は大内君で雨滴聲を我がものにして云うた。――諸君、お互に雨滴聲を如何にすべきや。――圜悟禪師は、從來間斷なし、無始劫來、未來永劫、降り通しに雨は降つて居る、』と云ふ。――或は然らん。されど、五日一風、十日一雨と云ふこともある。「坂は照る〳〵鈴鹿は曇る、間の土山、雨がふる。」を如何せん。「雨、霰、雪や氷と隔つれど、落つれば同じ谷川の水。」鏡淸も問僧も圜悟も雪竇も大内も、落つれば同じ谷川の水。――雨滴聲の外なし。――此の妙處は大家にあらざれば知る能はず。故に「作者難酬對。」と雪竇禪師は吟じられた。作者とは作家のこと。作家とは一人分上の人と云ふ程の事。』

或人は云ふ、何の酬對しがたきことかあらん。雨滴聲を聞い

て雨滴聲と云ふ、敢へて作家を要せん。三才の小僧でも必ず雨滴聲は雨滴聲と云ふ。――如何にも如何にも。寧ろ小僧は正直。正直の頭に神やどる。否、そのものそれが神だ雨滴聲だ。――纔に思慮あらば自救不了。焉ぞ酬對することを得ん。』故に云ふ、「若謂曾入流、」是は楞嚴經にある觀音の耳根圓通三昧。聲の境と聞く耳と一つになる、そこが入流の端的底。――理窟ではいかん。講釋では不是。聞くまゝ聲のまゝ、それが見性だ。それが成佛だ。微塵たりとも聲だの聞くだのと云ふ間隙があつたら入流の畫餅だ。――經に云ふ「能所對立。」聲の物と聞く主と二つに分る。二つに分れたら、何處まで行つても脫體

現成は出來ぬ。故に云ふ、「依然還不會。」說明をすればするほど、理窟を並ぶれば並ぶるほど、埒はあかぬ、寶處に遠くなる。――僧の問も理窟である。鏡淸の答も說明である。聞かずや。懶庵、大惠に參ず。外、入るを放たず、內、出づるを放たず、正恁麼時如何、と問ふ。大惠直下に竹篦を以て連打すること三下、庵、忽然として大悟す。』之は是れ能所の二見を打破し、知解の根元を截斷されたのである。』鏡淸、何が故に一棒下に僧の能所を打破し知解を截斷せざるや。』蓋し鏡淸禪師には別に仔細のあるあらん。佛祖と雖も窺知するを許さず。――

「會不會、」雪竇禪師、言を改めて曰く、會すると云ふも會せ

ずと云ふも敢へて不可なし、會するときは會する、三昧、會せざるときは會せざる三昧。――問ひに落ちずして語るに落つると云ふが、衲も知らず識らず理窟に流れ講釋に落ちた。――阿々々。――雪竇禪師の意旨は之是の雨滴聲、――畢竟會不會共に超越したる處である。――「南山北山雨轉霧霈。」盡乾坤、全宇宙、雨滴聲あるのみ、ザア〳〵。――圜悟禪師、共鳴して云く、頭上脚下、と。眼にも雨、耳にも雨、鼻にも雨、口にも雨、意識にも心根にも雨。雨、雨あるのみ。雨の外に一物もあることなし。――

聞く、澤庵禪師が柳生十兵衛に、少しも雨に濡れぬ劍法を敎へんとて、大雨中、石上に坐禪してヅブ濡れになられた、と云ふが、如何にも面白い。「二人行くひとりは濡れぬ村時雨、」と云ふ底の妙味がある。――圜悟禪師、慈悲の口を開いて云く、「若し喚んで雨聲となさば瞎(大馬鹿もの)。若し喚んで雨聲となさざれば瞎。」――然らば什麽の聲となすべきや。――諸君、お互は何と云ふべきか。――實參實悟せざるべからず。

――

(昭和十三年七月九日講演)

389
231

昭和十四年四月二十七日印刷
昭和十四年五月　四　日發行

發行兼印刷者　佐々木四郎
東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井合名會社内

發行所　東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井合名會社考査課

終